

《参考基礎データ》 有明海全体における生物に係る環境変化

1 ベントス

有明海湾奥部における1989年夏季と2000年夏季の調査によると、全マクロベントス（小型の底生動物）の平均密度は3,947個体/m²（1989年）から1,690個体/m²（2000年）に減少しており、これは主に二枚貝類の減少によるものであった（図1）。

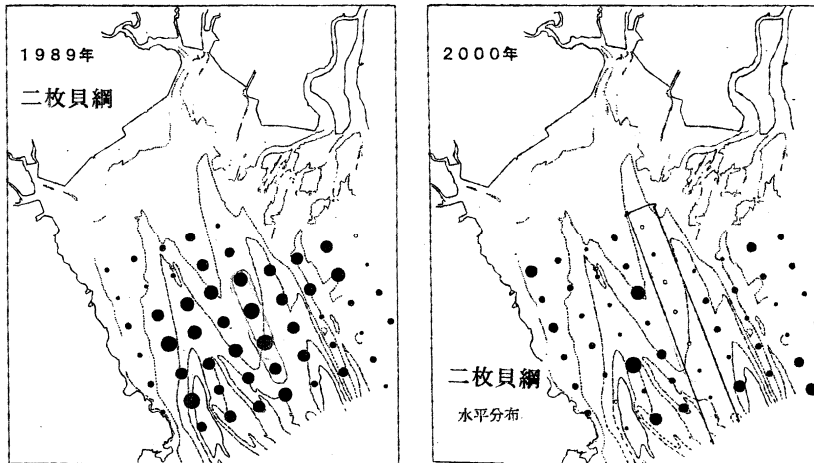


図1 有明海北西部におけるマクロベントス（うち二枚貝綱）の調査結果

マクロベントスの種類別にみると、シズクガイは1989年・2000年の調査で優占種であったが、1989年調査時に最優占種であったチヨノハナガイは2000年調査時に大きく減少した。2000年以降に行われた環境省調査（別添資料47）でもシズクガイは貝類で最も優占するが、チヨノハナガイは高密度で継続して出現しない。甲殻類は端脚目のホソツツムシは減少し、ドロクダムシ科の *Corophium* sp. が湾奥で増加した。多毛類はダルマゴカイが減少し、ケンサキスピオ、カタマガリギボシイソメが増加傾向にある（図2）。

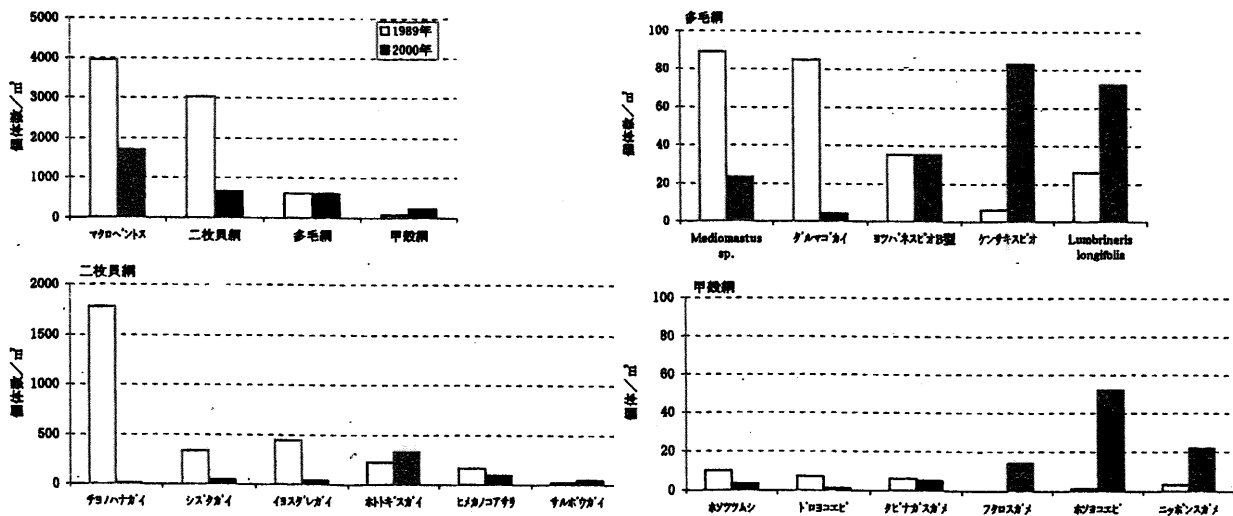


図2 マクロベントス個体数地点平均の比較

2 二枚貝

① タイラギ

タイラギの漁獲は1970～1990年までは数年おきに高い漁獲量が生じたが、長崎県では1990年代から、佐賀県・福岡県では2000年頃から漁獲がなくなり、以降有明海全域で殆ど漁獲されなくなった(図3)。特に長崎県海域では1990年代から漁獲量のピークがなくなり、漁獲の低迷が続いている。

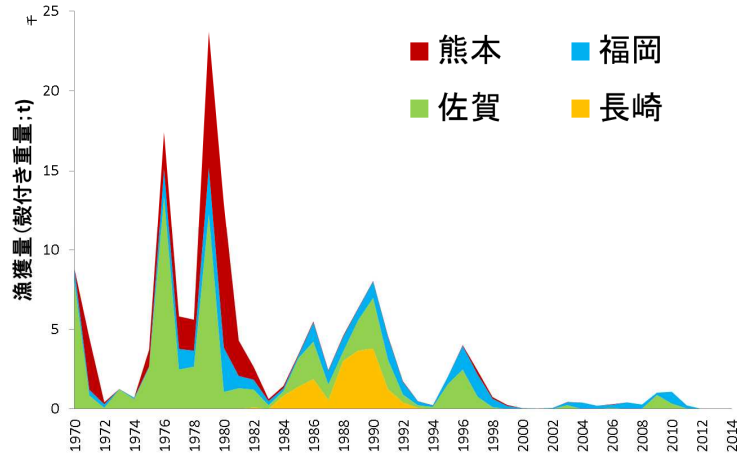


図3 有明海におけるタイラギの漁獲量の推移

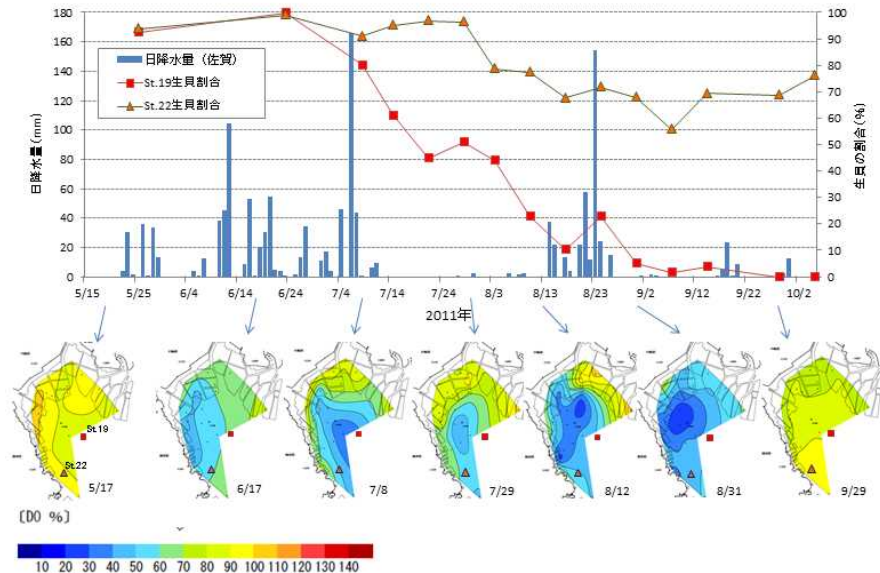


図4 貧酸素水塊の発生とタイラギ生息率の関係

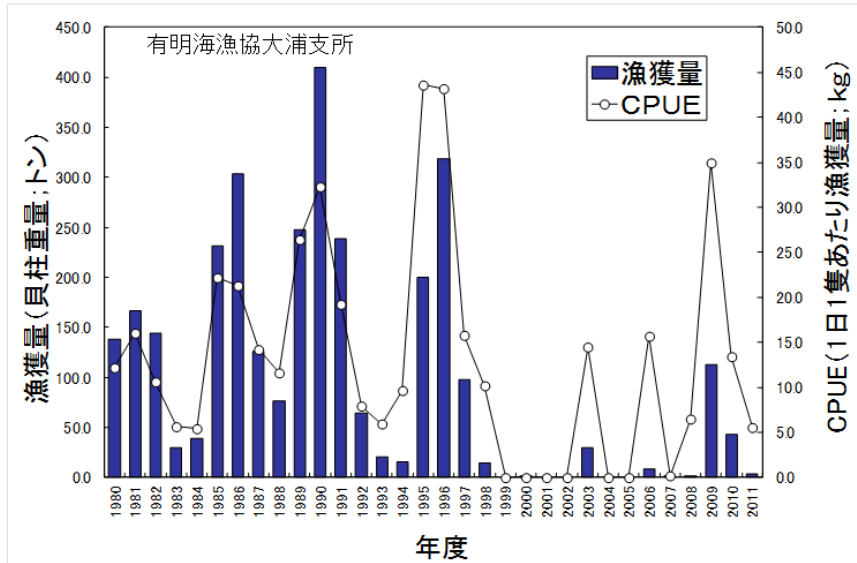


図 5 佐賀県海域におけるタイラギ漁獲量と CPUE の変化

② サルボウ

漁場は佐賀県西部、中部海域の養殖場及び矢部川河口域である。佐賀県沿岸においては、1970年代初頭に約1万4千tの漁獲量があったが、その後、斃死（原因は不明）が発生して漁獲量が激減した。斃死は1985年を境に収束し、当該海域の沿岸部で採苗した稚貝を沖合へ移植放流することによる漁場の拡大策もあり、佐賀県での生産量は1万t台に回復した。しかしながら、近年の生産量は減少傾向にあり、変動幅も大きい（図6）。

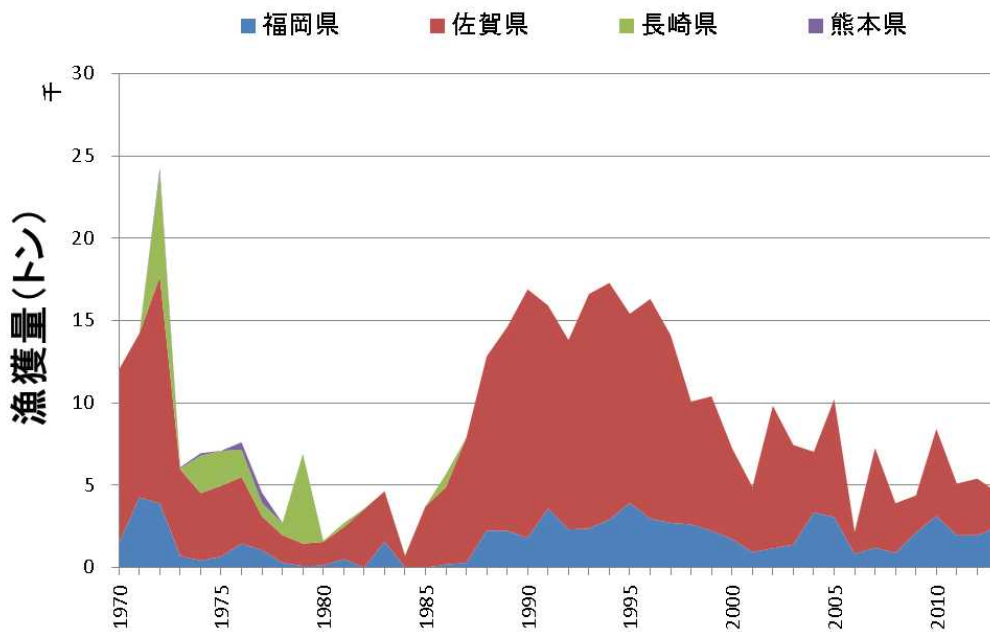


図 6 有明海におけるサルボウの漁獲量推移

③ アサリ

アサリは熊本沿岸で1977年に6万5千tの漁獲を記録したが、その後減少し、1990年半ばから2千t前後で推移してきた。2005年から2008年にかけて有明海全域で資源が一時的に回復し、2005年の漁獲量は1万トンに達した(図7)。

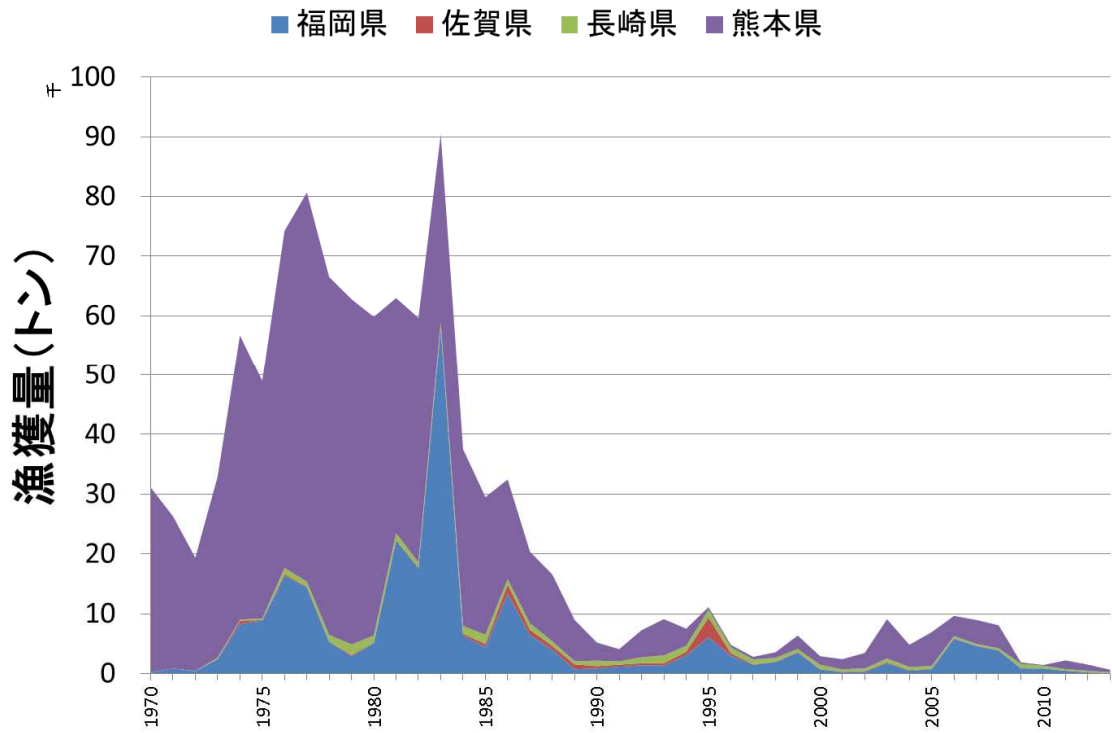


図7 有明海におけるアサリ漁獲量の推移